

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	真福寺蔵『八名普密陀羅尼經』鎌倉中期点
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	訓点語と訓点資料 , 83 : 49 - 63
Issue Date	1990-03-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00025047
Right	
Relation	



真福寺蔵 『八名普賢陀羅尼經』 鎌倉中期点

佐々木 勇

一、『八名普賢陀羅尼經』について

『八名普賢陀羅尼經』一卷は、玄奘三蔵 (A. D. 600~664) の漢訳経である。その内容は、経名の通り、釈迦が、八名普賢陀羅尼の功德を金剛主菩薩のために説いたものであり、この八名を聴く者は、當來世において地獄に墮ちず、命終に臨んで心身安穩にして、諸佛を現前に見得る功德の有ることを述べている。八名とは、一、功德字蔵・二、莊象耳・三、普勇猛・四、勝諸雲・五、成熾然・六、微妙色・七、嚴飾・八、金剛の八種の名字を言う。

『八名普賢陀羅尼經』の経名は、一般には「ハチミヤウフミツタラニキヤウ」と読まれ、『佛書解説大辞典』などにもその見出しで掲載されているが、古訓点資料によれば、「ハチベイホビツタランチケイ」といわれる「新漢音」で唱えられていたことが知られる。

『八名普賢陀羅尼經』(以下『八名經』とも略す。)の名は、既に『大唐内典録』(麟徳元(895)年。唐、道宣撰)に見られ、わが国にも玄奘訳経後間もなく伝わったものと思われる。¹⁾

本経が、わが国における「一切経」読誦の初めである白雉一(651)年の折²⁾に、その「一切経」の中に含まれていたものか否かは不明であるが、奈良時代に³⁾は写経・読誦がなされていたことは、伝存資料によって明らかである。

本邦の史料に『八名普賢陀羅尼經』の名そのものが見いだせるのは、實見の範囲では、天平五(733)年の写経目録(『正倉院文書』)が早い例である。

二月卅日、内堂進納

(略)

佛名經一卷[用紙八張] 七俱胝佛母心經一卷[紙四] 八名經一卷
[紙二] 六時行道一卷[紙卅八月内進大進] 以前経部卷数、專
所 御願寫訖、[厩坂寺僧四百口講説 齋会]

(『大日本古文書』七による。「」内は、小字割書き。)

この後は、比較的多くの写経目録・貢進解の中にその経名を見いだすことができる。この『八名普賢陀羅尼經』は、入沙彌試験の予備のために『法華経』『最勝王経』『薬師経』『般若理趣経』『多心経』などと並んで読誦されているものであり、密教経典の中で、当時重要視されていたものの一つであったと思われる。現在までも比較的多くの古写本が伝存し、その内には詳細な訓点⁴⁾が施された諸本が存することがこれを裏付けよう。

二、『八名普賢陀羅尼經』の現存訓点本

『八名普賢陀羅尼經』の古写本の内、現時点で知り得た訓点加本は、左記の二十四点である。⁴⁾

A 石山寺蔵保元二(1155)年朱点(仮名・ヨコト点(東大寺二論宗点))

「一切経 第三三函6」

B 京都国立博物館蔵貞心二(1224)年点(墨仮名音注・墨節博士) 鎌倉後期

頃点(墨仮名音注・朱節博士・朱声点・朱合符) [188B甲 重要美術品B]

C 京都女子大学蔵鎌倉初期点(朱声点・朱合符) 鎌倉中期点(墨声点・墨合

符・墨仮名音注) [KN 183-7 H 11]

D 真福寺藏鎌倉中期点(朱声点・墨仮名訓読注・朱返点・朱合符)〔第一四合一号〕

E 仁和寺藏鎌倉中期点(墨仮名音注・朱節博士) 南北朝期点(墨仮名音注)

〔経蔵八二二二〕

F 三宝院蔵康永三(1344)年点〔第三箱九〕

G 上野学園日本音楽資料室蔵南北朝期点(朱声点・朱節博士・墨仮名音注・墨節博士) 室町期点(墨仮名音注)〔二四八七二〕

H 東寺蔵明德四(1393)年頃点(朱声点・墨仮名音注・墨節博士)〔第三箱一九号〕

I 東寺蔵応永元(1394)年頃点(朱声点・墨仮名音注)〔第一四九箱一〇号〕

J 高野山金剛三昧院蔵応永八(1401)年頃点〔特13306〕

K 東寺蔵応永二四(1407)年頃点(朱声点・墨仮名音注)〔第一四九箱一六号〕

L 醍醐寺蔵正長一(1429)年点〔第一四六箱一八号〕

M 醍醐寺蔵永享五(1435)年点(声点・墨仮名音注・墨節博士)〔第一〇六箱四号〕

N 醍醐寺蔵文安元(1444)年点(朱声点・墨仮名音注・墨節博士)〔第一〇六箱五号〕

O 東寺蔵享徳元(1452)年点(朱声点・墨仮名音注)〔第一四九箱二七号〕

P 醍醐寺蔵文明一六(1486)年点(墨仮名音注・墨声点・墨節博士)〔第一〇二箱九七号〕

Q 高野山普門院蔵大永二(1522)年点〔第一五箱〕

R 仁和寺蔵室町期点(墨仮名音注・墨節博士・朱声点)〔経蔵八二二二〕

S 東寺蔵室町期点(朱声点・墨仮名音注)〔第一二箱一九号〕

T 醍醐寺蔵慶安一(1649)年点(墨声点・墨仮名音注・墨節博士)〔第一〇

六箱二号〕

U 高野山光明院蔵延享三(1675)年点〔第一五箱一一〕

V 東寺蔵元文五(1706)年点(朱声点・墨節博士)〔第一四五箱二六号〕

W 宝寿院蔵江戸中期点〔宗部第一事相部第五一号〕

X 大覚寺蔵加點時不明点

三、真福寺本の位置

本稿で取り上げたD真福寺本は、朱声点・墨仮名とともに鎌倉時代中期頃の加點と思われ、現存諸本中、比較的古い訓点本である。

その訓点について見るに、朱声点は、B京都国立博物館蔵本以下の諸本と同様、漢字音で直読する際の当該字の声調並びに清濁を示しており、鎌倉時代における本経講誦の実態を知る資料として貴重である。一方の墨の訓点は、右の朱声点とは対応せず、『八名経』本文を訓読している。これまで本経の訓読資料は、A石山寺蔵保元一(1157)年点しか見いだされていない。この真福寺本の出現によって、『八名経』が鎌倉時代中期においても訓読されたことを知ることができ、真福寺本の訓点は、本経の訓読の歴史、さらには、仏典訓読の歴史を考える上でも重要な史料となるものと思われる。また、一本中に、漢字音による直読の実態と訓読の実態とを共に記した資料は、『八名経』の訓点資料中には外に存せず、この点からも興味深いものである。

四、真福寺本の書誌

真福寺蔵『八名普密陀羅尼經』の装丁は、巻十本である。首尾を完存しており、一紙を用じて書写している。料紙は、斐文じり楮紙である。巻頭の内

題右下に「□□院(?)」と、恐らくは本文と同筆で書かれている。これは本資料が書写された場所あるいは、伝えた寺院を記したものであろうが、虫損のため判読しかねる。

外題は、本文とは別の後筆で「八名経」とあるが、内題・尾題ともに「八名普賢陀羅尼經」と記す。残念ながら、奥書は存しない。紙高は、一六、四cm、墨界、界高一〇・〇cm、界幅平均二・〇cmである。

本文は、鎌倉時代中期の書写にかかると認められ、本文書写と同時期と思われる墨点と朱点(第一次朱点)及び、それより後の朱点(第二次朱点)が付されている。

墨点は、全巻に互り詳細に加点されている。

第一次朱点(大振りで淡い朱)は、冒頭から一五行目までの声点と、全巻の句切り点及び、内題右肩の「口覺梵紙」・二行目下の「二枚」の漢字とである。

第二次朱点(小振りで濃い朱)は、一六行目以下の声点と、全巻を通じて存する返点・合符とであり、特に返点が第一次朱点の声点の上に重ねて加点されることが多く、こちらが後の加点であることが判明する。

五、真福寺本の訓点

1 墨点

本資料の墨点は、その大部分が片仮名であるが、一例のみ、音注を類意字(上)をもって注した例が存する。

閑静(三〇行目)

また、二行目の陀羅尼の二字目「蘇」に対する割注の二字目「施」を見せ消ちとし、上欄に「毛云極直復切」と注するのも同筆の墨点であると思われる。

この墨点によって、『八名普賢陀羅尼經』の鎌倉時代中期における一訓法が知られる。⁽⁵⁾

(1) 字音の系統

本資料の墨点中には字音注が多く、これによって本資料訓読の際の漢字音について知ることができる。

まず、全体の字音の系統を知るために、声母と韻とについて、本資料中の用例を掲げる。⁽⁶⁾

a、声母

日母	泥母	微母	明母	声母					
				当該字	所在 ⁽⁷⁾				
然	遠	男	忘	微	彌	妙	蜜	8・9・25	本資料の例
14	5	6	32	15	20	15			
ネン	ネウ	ナン	マウ	ミ	ミ	メウ	ミツ		音注
	ナ行	ナ行	マ行	マ行					呉音
	ザ行	ダ行	バ行	バ行					漢音

b、韻

陽開三	元合	元開	殷	泰合	齊開	模	鍾四	鍾三	東四	東直	韻										
象	莊	願	園	閑	近	隱	會	諦	禮	部	普	勇	踊	用	奉	獄	縮	終	功	当該字	本資料の例
13	13	20	3	29	30	18	34	14	11	20	8	14	10	7	20	17	31	9	7	所在	
		28						27			25				35					意注	
サウ	シヤウ	クワン	ヨシ	ケン	コン	ヨシ	エ	タイ	ライ	フ	フ	ユ	ユ	ユウ	フウ	コク	シユク	シユ	ク		
サウ	シヤウ	クワン	ヨシ	ケン	④ン	エ	⑦イ		フ					ユウ	フウ	コク	シユク	シユウ	クウ		呉音
シヤウ	サウ	クエン	エン	カン	④ン	クワイ	④イ		ホ					ヨウ	ホウ	クキヨク	シク	シウ	コウ		漢音

以上によって知られるごとく、本資料の墨点の音注は、a、声母・b、韻

凡	嚴	侵三	○	尤四	尤三	侯	蒸三	清開四	庚開三	庚開直												
梵	劫	業	嚴	金	洲	修	呪	受	受	手	究	後	色	益	静	誠	成	頂	命	竟	猛	猛
2	17	7	15	15	20	26	8	9	6	6	21	5	15	7	30	27	14	11	31	21	7	14
30		9		29		30	16		29													
ホム	コウ	コウ	コム	コム	シウ	シユ	シユ	ス	シユ	シユ	ク	コ	シキ	ヤク	上	シヤウ	シヤウ	チヤウ	ミヤウ	キヤウ	ミヤ	ミヤウ
ホム	コフ	コム	コム	?					シユ	ク	コ	シキ	ヤク			④ヤウ	④ヤウ	④ヤウ	④ヤウ			ミヤウ
ハム	ケフ	ケム	キム						シウ	キウ	コウ	シヨク	エキ			⑤イ	⑤イ	⑤イ				マウ

の双方で呉音の特徴を示すのである。ただ一例、b、韻の尤韻四等の「州」は、漢音形と一致するが、この字と同一小韻字の「州」が、『観智院本類聚名義抄』に、「州上州 木州」(声点省略) (僧上五四一2)と和音「シウ」として登載されており、この字については、呉音形としても「シウ」が一般的であった可能性も存する。

本資料の古訓点資料の音注は、B 京都国立博物館蔵本以下、漢音系の字音その中でも伝来の新しい「新漢音」を記しているが、本資料の墨点の音注は、呉音によっているのである。この、他の諸本と本資料との相違は、本文を字音で直読するか、訓読するか別に依るものかも知れない。

(2) 韻尾の表記について

a. n 韻尾・m 韻尾の表記

- ① n 韻尾を「ン」表記 (8 字 24 例)
- | | | | | | | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 園 ³ | 前 ⁵ | 神 ⁷ | 損 ⁸ | 損 ⁹ | 飲 ¹⁰ | 分 ¹² | 演 ¹² | 善 ¹⁴ | 雲 ¹⁴ |
| 然 ¹⁴ | 身 ¹⁸ | 安 ¹⁸ | 隱 ¹⁸ | 願 ²⁰ | 断 ²⁶ | 断 ²⁶ | 閑 ²⁹ | 親 ³⁰ | 近 ³⁰ |
- 神⁸・25
- ② n 韻尾を「ム」表記 (1 字 2 例)
- 神⁸・25
- ③ m 韻尾を「ム」表記 (8 字 10 例)
- | | | | | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 林 ² | 梵 ³⁰ | 敵 ¹⁵ | 金 ¹⁵ | 心 ¹⁸ | 深 ¹⁹ | 甚 ¹⁹ | 瞻 ²⁰ |
|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
- ④ m 韻尾を「ン」表記 (1 字 1 例)
- 男⁶

右が、本資料に見られる n・m 韻尾表記例の全例である (ただし、音写字・陀羅尼字は除いた)。鎌倉中期という書写時期から考えて、原音と対応しない表記 (右の②④) が相当数見られることが予想されたが、実際には右例のごとく比較的古用になかった表記がなされている。先に指摘したように、本

墨点は、拗音の類音字表記を僅かに一例ながら残すのであり、あるいは鎌倉時代初期頃の親本からの移点によるものかも知れない。

b. 唇内入声韻尾の表記

- ① 唇内入声韻尾 (p) を「フ」表記 (1 字 1 例)

給³

- ② 唇内入声韻尾 (p) を「ウ」表記 (2 字 3 例)

業⁷・9 劫¹⁷

右が、本資料に見られる唇内入声韻尾仮名表記例の全例である。唇内入声韻尾を「ウ」表記する例は、既に院政時代から見られるのであり、特記すべき事柄ではないが、鎌倉中期書写の一資料の実態として示しておきたい。

c. 韻尾無表記例

- ① 神用威猛⁷

- ② 金剛手²⁹

僅かに 2 字 2 例ではあるが、本点には右のごとくに、韻尾を仮名表記しない例が存する。「猛」は、梗韻、「剛」は、唐韻で、それぞれ「ウ」韻尾字であり、しかも次の音節と一まとまりに発音されたものと考えられる。特にこのような場合に「ウ」韻尾が弱化し、表記されない場合があることを、かつて述べたことがある。この 2 例も、それらの例に加えられるべきものである。

2 第一次朱点

ここでは、特に声点について述べたい。

本資料の第一次朱声点は、「如^レ・是^レ・我^レ・聞^レ」のように、墨点では和訓で訓読している漢字にも加点されており、墨点の訓読とは無関係に、字音で直読した際のものである。

(1) 声調体系

まず、第一次朱声点の反映する声調体系を知るために、『広韻』との比較を行なうと、後掲表1の通りである。(ただし、音写字・陀羅尼字に対する加点例は除外した。)

表1の『広韻』の体系との比較から、次の二点の事柄が知られる。

第一に、『広韻』の枠に基本的には一致するものであり、本資料の第一次朱声点が漢音系の字音声調を反映しているという点である。

第二に、『広韻』の枠から外れるものの中で、『広韻』の上声全濁字が去声となつているものが目立ち、第一次朱声点の反映する字音が、唐代長安音の中でも新しい部類に属するいわゆる「新漢音」であるということである。¹³⁾

なお、『広韻』上声全濁字で本資料においても上声点が加点されている漢字は、「是・跪」の2字2例であり、『広韻』上声全濁字で本資料では去声点が加点されている漢字は、「善(3例)・受(2例)・後(2例)・在・象」の5字9例である。このうち上声点が加点された「是・跪」は、わが国の漢音では、一音節字であり、去声点が加点された「善・受・後・在・象」は、二音節字である。

筆者はかつて、『蒙求』の漢音直読資料の一本である岩崎文庫本の声調が、一音節字と二音節字とで差異の存するものであることを発表したことがある。¹⁴⁾ 具体的には、「一音節去声字の上声化」及び「一音節平声軽字の上声化」といった事象について、一音節字と二音節字とに違いが見られたのである。日本語の音節数の相違によって差異の見られる声調変化は、わが国で生じた声

調変化である。すなわち、漢音系資料の中でも、鎌倉時代以降の資料の内には、わが国における声調変化を蒙ったものが存するのである。

右で上声点が加点されていた「是・跪」の2字も、『広韻』上声全濁字が、上声の声調をそのままにとめた例ではなく、他の字と同様に去声に移行した声調が伝えられた後に、「一音節去声字の上声化」というわが国の声調変化によって、再び上声に移行した例であると考えたほうが穩当のようである。事実、本資料よりも古い声点加点例を有するC京都女子大蔵本では、「是」には本資料以下の諸本と同じく上声の声点が加点されているが、「跪」には去声点が加点されており、『八名普賢陀羅尼經』読誦音において、古くは去声であったことが伺われるのである。

右例以外にも、本資料を含む『八名經』訓点資料の中に、わが国で生じた声調変化の例を指摘することが可能であるが、本稿の目的の範囲を越えるため、今回記述することは差し控えたい。

(2) 明母・微母字の声点

本資料の明母・微母字のうち、第一次朱声点が加点されているのは、次の諸字である。

名1・8・13・13・14・14・14・15・15・15
無4・4・9 明7 猛7・14 微15 蜜1・8・9・13 聞2

そして、右の諸字は、総て双点の加点例であり、これらの例の頭音が濁音であったことが知られる。

しかし、右の諸字の内「名」「明」「猛」の漢音形は、それぞれ「メイ」「メイ」「マウ」であつて、当時双点が加点されるものとは異なる。「名」「明」「猛」に対する双点の加点は、これらの字をそれぞれ「バイ」「バイ」「パウ」といういわゆる「新漢音形」で唱えたことを示すものと思われる。

この点は、(1) 声調体系の実態と符合し、第一次朱声点が新漢音による読誦声調を反映していることが判明する。

3 第二次朱点

本資料に加えられた第二次朱点は、(1) 十六行目以下の声点 (2) 全巻を通して見られる返点、及び(3) 全巻に亘って見られる合符、である。

(1) 朱声点

第二次朱声点は、陀羅尼・音訳字に対する加点が大部分である。陀羅尼・音訳字を除く声点加点例は、左の3字3例である。

洲²⁰ 捨²⁶ 離²⁶

この3例は、『広韻』の声調とは一致せず、『法華經單字』などの呉音声調に等しい。本第二次朱点が、(2) 返点(3) 合符によって訓読を示す訓点である点と、やはり訓読する中で加えられた本資料の墨点の漢字音が呉音読を示していたこと(先述)とを考え合わせれば、首肯されることである。

(2) 返点

返点は、全巻に亘り詳しく加點されており、これに従って全巻を訓読することが可能である。ただし、加點時期については、第一次朱点よりも後の加點であるということ以外は不明であり、いつの時点の訓読法を示すものかは、必ずしも明らかではない。しかし、本返点は、鎌倉時代中期の墨点の訓読の仕方と大部分矛盾しないのであり、鎌倉中期からさほど降らない時期の加點であると言えるかも知れない。

本返点が墨点の訓法と一致しないのは、次の箇所である。

a 身心安隱見有(略) 説(略) 法要(18行目)
b 所願(28行目)

aの例は、本来「安隱見有」とあるべきものが、一字分すつされたものと思われる。次のbの例は、墨点が「所願」と音読しているところを、本点が「願(スル)所(ノ)」と訓読している例である。

右の二例以外には、墨点の訓読に反する箇所はない。

(3) 合符

次に、本資料に見られる合符の全例を掲げる。

- 一 一時2 無一量4 無一数4 異一類5 上一明一呪7 事一業8
- 始一終9 受一持9・28・30 歛一喜10 踊一躍10 思一惟12 分一別12
- 演一説12 住一坐19 奉一事20 彌一勒20 捨一離26 毒一心26
- 護一持27 新一近30 読一誦30

以上、本資料の合符は、訓読の際の二字あるいは三字の結び付きを示すものであって、「促音表示としての合符」などではない。これは、本点が訓読を示すことに起因するものであろう。

六、むすび

『八名密陀羅尼經』の字音直読資料は、鎌倉時代以降、比較的多くのものが現存している。その中で、真福寺本は、早い時期の『八名經』読誦声調を伝える資料として貴重なものであった。今後は、他の訓点本との比較によって、『八名密陀羅尼經』の音読に見られる音の変化を通して、日本漢字音の変遷を考えることも可能であろうし、また、課題としなければならないと考えている。

表 I

入 声		去 声	上 声	平 声		本資料	広韻
重	軽			重	軽		
			2 (2)	9 (11)	11 (15)	清	平 声
			2 (2)	1 (1)		次清	
				9 (18)		濁	
				22 (35)	1 (3)	次濁	
		2 (3)	10 (11)		1 (1)	清	上 声
			2 (4)			次清	
		5 (9)	2 (2)			濁	
		2 (2)	12 (16)			次濁	
		8 (10)	2 (4)			清	去 声
		2 (3)				次清	
		6 (8)				濁	
		6 (7)	2 (5)	2 (2)		次濁	
10 (14)	3 (7)					清	入 声
1 (1)						次清	
7 (8)	1 (1)					濁	
4 (8)	1 (1)					次濁	

(表中上段の数字は異なり字数、下段は延べ字数である。空欄は、用例無し。)

注

- (1) 田中塊堂『日本寫經標卷』には、「奈良朝に於ける一切經書の内容は時に大唐内典錄(三千二百六十一卷)に據つて行はれたと思はるゝものもあるが、天平十一年一月十三日及四月一五日の寫經司啓には「合依開元目錄心寫一切經律論伍肆拾捌卷」と明記してゐるので凡そ開元錄所載の經典とその後に翻訳されたものを含めてゐるものと見てよい。」(一二二頁)とある。『開元目錄』(『開元釈教錄』)には、本經の名が存する。
- (2) 『日本書紀』白雉二年二月晦。「於味經」寫請二千一百余僧尼使讀一切經。」(『新訂増補國史大系』本による。)
- (3) 石田茂作『寫經より見たる奈良朝仏教の研究』(東洋文庫論叢 第十一。昭和五年五月初版。昭和四一年七月再版。)一五二頁参照。
- (4) E・M・N・P・R・Tの諸本は、上野学園日本音楽資料室架蔵の紙焼写真により、K・Sは、広島大学文学部国語学国文学研究室蔵の紙焼写真によつてゐる。また、A・F・H・I・J・L・O・Q・U・V・W・Xの記述は、目錄に基づいてゐる。
- (5) ただし、本資料の和訓点について解説することは、調査・資料の不足のため、現時点では避けたい。
- (6) 日本漢字音の吳音・漢音の首形については、沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版。昭和六一年六月。)を参考とした。
- (7) 算用数字は、所在の行数である。以下同じ。
- (8) 上・去・入声は、平声韻目に一括して取り扱った。
- (9) 真福寺本以外の唯一の訓読資料であるA石山寺蔵保元二年点についての調査を未だなし得ていないため、詳しいことは不明であるが、中国で作製せられた記録・伝記及び、本邦で作製せられた仏典中には漢音読主

体で訓読した資料も存するが(『大慈園寺三蔵法師伝』『南海寄帰内法伝』『大唐西域記』『文鏡秘府論』『惠果和尚之碑文』『遍照發揮性靈集』など)、本經のごとき漢訳經の漢音讀資料は、現在知られる範囲では、字音直讀資料に限られるようである(『仏母大孔雀明王經』『大衆金剛不空真実摩耶經』『仏説阿彌陀經』など)。この点は、仏典の訓讀・讀誦と日本漢字音の体系との關係上、興味深い事実であらう。

- (10) 小林芳規「訓点における拗音表記の沿革」(『王朝文学』九号。昭和三八年一〇月。)参照。
- (11) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要特輯号』3。昭和四六年三月。)など参照。
- (12) 拙稿「吳音・音節去声字に対する上声点加占例について」(『国文学』改第一二三号。昭和六二年三月。)
- (13) 沼本克明「平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究」(武蔵野書院。昭和五七年三月。)第二部第五章。同「所謂新漢音資料としての「九方便」「五梅」の意義資料について」(『鎌倉時代語研究』第七輯。昭和五九年五月。)参照。
- (14) 拙稿「日本漢字音に於ける声調変化——岩崎文庫本『蒙求』を中心にして」(『新大國語』第一四号。昭和六三年三月。)
- (15) 1 墨点 (1) 字音の系統 参照。
- (16) 注(13) 引用著書 付論第二章参照。ただし、字音直讀資料における合符も、促音のみを示しているわけではない。
- 〔付記〕 原本の閲覽に当たり、真福寺宝生院の皆様には大変お世話になりました。また、他の現存訓点本の有無については、福島和夫先生に多くをお教え戴きました。記して深謝申し上げます。

翻刻

「内は、第一次朱点による文字である。また、15行目までの声点と全巻に亘って見られる句切り点も第一次朱点であるが、特に区別しなかった。返点・合符及び16行目以下の声点は、総て第二次朱点である。

「**四** 覺梵紙



1 八名普賢陀羅尼經 三藏法師玄奘奉詔譯

「二枚」

2 如是、我聞一時薄伽梵在室羅筏住誓多林

3 給孤獨園與大苾芻衆千二百五十人俱及

4 無量無數菩薩摩訶薩并諸天人阿素洛等

5 異類大衆前後圍遶

6 尔ソノ時トキニ世セ尊ソノミ告ツケテ金カウ剛コウ手テ菩ボ薩サツ言コトヲク善ヨシ男ナシ子コ汝ナレキカ所トコロ受シユ

7 持チスル諸シヨ上ウヘ明アカシ呪ハ神シニ用ユウ威イ猛マウ功コウ業ゴウ難カタシ成ナリ雖イツモ後ノチニ為ナスト益ヤククラ

8 或アルハ初ハジメニ暫シラク損ソレス今イナ有アリ八ハチ名ナ普フ蜜ミツ神シニ呪ヒト威イ德トク廣クラウ大オホ事コトナリ

9 業ゴウ易マろシ成ナリ神シニ用ユウ秘ヒ密ミツ始ハジメ終シユ無ナシ損ソレ能ヨク受スチスル持チ者モノハ必カナラズ獲ウ

10 利リ樂ラクク當トキニ為スニ汝ナレキカ說トクム汝ナレキカ樂チカクニヤ聞キカムト不イナヤ時トキニ金カウ剛コウ手テ歡クシ喜シ踊ウ

11 躍ヤクシチ頂チヤウライシ禮レイ佛ブツ足ミヤクシ右ミウシ跪ヒサマク合アハセテ掌タナモロク請イナマシテ言コトヲク世セ尊ソノミ唯タミ願チカクハ為タスニ說トクム

12 佛ブツ言コト諦アキラカニ聽キク極キマチ善ヨク思シ惟ナラセヨ吾ワレ今イナ為タスニ汝ナレキカ分ベシ別アハレ演エン說セム何ナニカ

13 謂^{イフ}八^{ハチ}名^ナ普^フ蜜^{ミツ}神^{カミ}呪^フ一^{イツ}名^ナ功^ク德^{トク}寶^{ホウ}藏^{ゾウ}二^ニ名^ナ莊^{シヤウ}象^{サウ}

14 耳^{ミミ}三^{サン}名^ナ善^{ゼン}勇^{ユウ}猛^{マウ}四^シ名^ナ勝^{ショウ}諦^{テイ}雲^{ウン}五^ゴ名^ナ成^{セイ}熾^シ然^{ゼン}六^{ロク}

15 名^ナ微^ミ妙^{ミョウ}色^{シキ}七^{シチ}名^ナ嚴^{エン}飾^{シキ}八^{ハチ}名^ナ金^{キン}剛^{コウ}

16 若^{ニシ}有^{アル}得^{トク}聞^{クワ}此^{コノ}八^{ハチ}名^ナ呪^フ於^オ當^{トウ}來^{ライ}世^セ經^{キヤウ}七^{シチ}俱^ク胝^{テイ}那^ナ

17 廣^{コウ}多^タ百^{ヒャク}千^{セン}大^{ダイ}劫^{キヤク}不^フ墮^ダ地^チ獄^{キヤク}傍^{ボウ}生^{セイ}餓^ガ鬼^キ將^{ショウ}命^{メイ}終^{シュウ}

18 時^{トキ}身^シ心^{シン}安^{アン}隱^{イン}見^{ケン}有^{アル}諸^{ショ}佛^{ブツ}及^{ツキ}諸^{ショ}菩^ボ薩^{サツ}來^{ライ}現^{ゲン}其^{ソノ}前^{マエ}

19 爲^{タス}說^{セツ}大^{ダイ}乘^{ジョウ}甚^{シム}深^{シム}法^{ホフ}要^{エウ}既^{スデ}聞^{ケン}法^{ホフ}已^イ必^{カナラシ}得^{トク}往^{ワウ}一^{イツ}生^{セイ}都^ト

20

史シ多タ天テン奉フ事シ弥ミ勒ロク後コ隨ジ弥ミ勒ロク下カ瞻セン部フ洲シ行コウ願ガン

21

漸セン增ゾウ乃ノウ至シ究ク竟キヤウ陀タ羅ラ尼ニ曰イツ

サハシヤクニ

22

安ア頤イ齧タイ已イ擿タイ下カ界ケ同ドウ反ハン筏ハク齒タイ來ライ捺ナ齒タイ來ライ竭キヤク刺ラ齒タイ來ライ蘇ソ謎マイ蘇ソ摩マ蘇ソ

23

契ケイ薩サ縛ハク迦カ摩マ沙サ達ダツ泥ニ呬キ梨リ寐ヒ梨リ薜イ梨リ薜イ悉シツ殿テン

24

覩ト謎マイ薩サ縛ハク迦カ摩マ娑サ駄ダ室シツ遮シヤ縵マン怛タン羅ラ般ハン陀タ莎シャ呵カ

25

佛ブツ說トク如ニ是シ普フ蜜ミツ呪ジュ時ジ八ハチ十ジュウ俱ク胝ヂ諸シュ惡アク鬼クイ神シン比ヒ皆ケツ

26

生シヤウ歡カン喜キ捨シヤ離リ毒トク心シン歸クイ佛ブツ法ホフ僧ソウ斷タン惡アク修シュ善ゼン俱ク

27 詣佛所發誠諦言願常護持此大神呪令

28 受持者身心安樂佛言善哉如汝所願若有

29 善男子善女人歸佛法僧及金剛手能處閑

30 靜堅修梵行親近制多受持讀誦所求善願

31 無不皆得乃至無上正等菩提恒憶宿命無

32 有忘失

33 時薄伽梵說是經已金剛手等一切菩薩及

34

諸天人阿素洛等一切衆會聞佛所說皆大

35

歡喜信受奉行

36

八名普蜜陀羅尼經

尾張國大須	寶生院經藏	圖書寺社官	府點檢之印
-------	-------	-------	-------

(朱印。尾題に重ねて押されたり。)

(平成元年十二月十九日受理)